

No. 991

# 輪島王座を防衛 —世界Jミドル級選手権—

一月九日、東京体育館には世界Jミドル級選手権試合を見ようと一万二千人のボクシングファンがつめかけた。チャンピオン輪島功一がむかえうつ挑戦者は、はるばるメキシコからやってきた29戦無敗の強打者オリベイラ。試合は一回、オリベイラのするどい右フックが、輪島の顔面をとらえ早くもチャンピオン、ピンチ。二、三、四回とボクシングの教科書のように正確な攻撃をするオリベイラの前に輪島ピンチの連続。中盤に入り五回かたさのとれた輪島が反撃、ボディから顔面へと連打をあびせた。

試合は両者互角のまま終盤へ。疲れはてた両者にクリンチがめだち、ノックアウトの期待は裏切られる凡戦となつた。

輪島得意のかえる飛びも不発におわり、結局試合は引分け、辛くもチャンピオン輪島の三度目の防衛が成った。

## 飛騨のかたりべ

『白い壁や、すだれ張りの出格子の民家の多い町を歩けば低い二階に、「こうじ」と書いた円い看板をぶらさげた家もあれば、酒家では、杉の葉の球を軒に吊して、新酒の売り出しを知らせている。400年前に出来たという街路は音の京都を偲ばせている。』

国文学者金田一春彦氏は、飛騨高山をこう書いた。更にこの高山で、民話を書きつづける小鷹ふざさん（60才）を訪れ、それをきっかけに一冊の民話集「ぬい女物語」が生まれた。

幕末の頃生まれ92才でこの世を去るまで、飛騨で生き抜いた「ぬい女」が繰り返し、孫のふざさんに、語り伝えた話をまとめたものだ。

家の中へ宝物を背負ってかけこんでくるといり馬頭観世音の絵馬がかけられた地主小鷹家も、転落地主の悲哀をなめ今はその面影を残すだけだ。その悲哀にずっと耐え、「ぬい女」は、昔語りを語って聞かせた。

自然が破壊されていくように地方の風習や言葉もまた失われていく。山深い風土と共に自分をはぐくんしてくれた民話を今のうちに書きとめておかなければ……と語るふざさん。

民話はのんびりとした農村の炉端から生まれるものだ。生活のひとつひとつの中から積もりつもって、からみあつた糸がほぐれてくるように出てくるものだ。山国の一一夜物語だ、ともいう。

『川の流れに沿って発展していった長い村はいくつかの字に別れ、字と字の区切りのように橋があった。人々は橋のたもとを橋場と呼んだ。それは村人のひとつの広場であった。橋の手前には、日清日露の忠靈碑が建っていて子守娘の遊んでる広場であった。橋の向こうのたもとにはおけやがあって、下駄の歯入れもしていた。人々は家の名前を呼ばずに橋場のとつあと呼んだ。とつあのがずる竹の先のおうかんまで伸びて生き物のようにビコビコ踊っておった。農休みの日には白いシャツを着た若者が橋場に集まってきた。……』

昔でも今でも人間の広場があった。消えたり生まれたりした広場、今ふざさんは、自分の生きた生涯に見聞きした飛騨びとの広場を民話に書きのこそうと筆を走らせる。